

# 「資料紹介」

図書館の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。

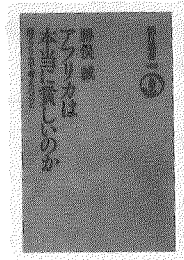
岡倉登志・北川勝彦著  
日本・アフリカ交流史—明治期から第二次世界大戦期まで— 東京 同文館 1993年 252p.



日本のアフリカ研究の分野で、重要にもかかわらず遅れている分野の一つに戦前の日本とアフリカの関係史がある。故西野照太郎氏の明治期の文献を通してみた日本人のアフリカ観の研究は恐らくこの分野に一石を投じた最初のものであろう。その後、この分野に関心を抱く研究者も少しずつ出はじめ、最近では青木澄夫氏が人物論を軸に『アフリカに渡った日本人』(本書の紹介については本誌 17号を参照)を上梓した。これに対し、本書はそれぞれアフリカ史、アフリカの経済史を専攻する著者たちが、これまで個々の論文で発表してきたものを土台に、戦前の日本とアフリカの関係史を大陸規模でまとめた包括的な著作である。すなわち、構成は日本人のアフリカ観(第1章)、日本とエチオピア(第2章)、日本とエジプト(第3章)、日本と東アフリカの経済関係(第4章)、日本と南アフリカ(第5章)、日本と西アフリカ(第6章)から成る。著者たちは「穴だらけ」と謙遜しているが、各所に散在する一次史料を発掘し、それに基づき記述した各章は貴重であり、表題の名に恥じず、今後の研究者の導きの糸となっていくであろう。特に第1章は全体のいわば総論にあたり、日本人のアフリカ観の変遷を(1)明治前半期、(2)日清戦争直後、(3)第1次世界大戦後の3期に区分し、その変遷を明らかにすると同時に、日本のアフリカに対する「クリーン・ハンド論」を痛烈に批判している。また、評者にとって興味深かったのは、未完に終わったエジプト、エチオピアの「近代化」と日本の「近代化」との比較史的考察であり、現在のアフリカ経済危機に対する「アジアの教訓」がすでにこの時期に行なわれていたことは驚きであった。さらに囲み記事とはいえアフリカとかかわった人々を紹介する欄は充実して読みごたえがある。

(林 晃史)

勝俣 誠著 アフリカは本当に貧しいのか 東京 朝日新聞社 1993年 258p.



本書の中で著者は1980年代初め西アフリカのセネガルに滞在中に「得体の知れない高熱に見舞われて、少々心細くなり、大学の診療所へかけ込んだ」ときの経験を述べているが(本書 83~87ページ)、そこで「病院など近くにない農村の住民や、社会保障制度に入っていない人は(病気がなった時)どうするのだろうか」という疑問をもち、農村の住民が「キンケリバ」とよばれるマラリアの予防と治療に有効な薬草を伝統的な治療師によって投薬してもらったり、場合によっては「まじない師」に頼ることもあることを知る。

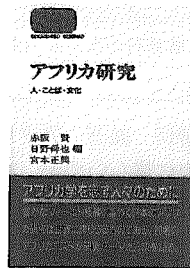
これは、ほんの一例であるが、著者は自分の経験や体験を自分一人の次元に閉じ込めるのではなく、「このような場合、アフリカの人々はどうのように対処したり、対応するのだろうか」と考え、自らの経験を相対化するという傾向がきわめて強い。こうした著者の思考方法は、アフリカの人々はたとえ自分と同じ近代的な設備や制度には恵まれていなくても、人間として自然に備わった知恵があるに違いないという人間的共感を前提にして、はじめて生まれてくるのであろう。

同時にそれは、直接「眼に見える」ものによって優劣や貧富、あるいは貴賤などを判断することを当然であるかのように考えてきた「近代的」物質文明社会の価値観に対する痛烈な批判でもあり、このような価値観の相対化に直結する「学びの姿勢」であるといってもよい。

著者は、本書の中で「対象となる社会をまず謙虚に学ぶ」ことの大切さを重ねて強調している。著者はそれを自ら実践しているのであり、それが著者の言葉に大きな説得力を与えていることは間違いない。

(細見真也)

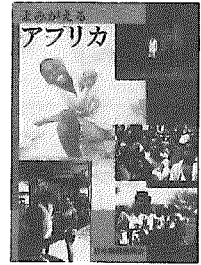
赤阪 賢, 日野舜也, 宮本  
正興編 アフリカ研究—  
人・ことば・文化 京都  
世界思想社 1993年  
294p.



日本におけるアフリカ研究は、霊長類学研究と人類学研究を両輪としてきたといっても過言ではあるまい。その一方の先駆者であり、長らく後進の指導に当たってこられた長老、和崎洋一氏が、1992年6月29日に逝去された。同月15日に今西錦司氏の逝去が報じられ、アフリカ研究の巨星落つとの感慨さめやらぬ時期のことであった。本書は、和崎洋一氏を偲んで、同氏と親しかった20名のアフリカ研究者により編まれた追悼の書であり、フィールドワークを重んじるアフリカ研究の伝統を継承し発展させていくという決意を表明した論文集である。本書を構成する四つの章、「人と自然」(4論文)、「人とことば」(6論文)、「人と文化」(8論文)、「政治と経済」(2論文)は、故和崎氏の交友関係の広さを物語っている。「各執筆者は、それぞれの個性をもって、独自の関心のあり方を率直に論じることで、論文としての質を低下させることなく、一般読者、大学生、あるいはこれからアフリカ研究を志す若い世代に、具体的に、「アフリカ研究の何たるかを訴えかけ」「(はしがき)」という本書の意図は、みごとに成功しているように思う。学会報告や学術論文では、どのような問題設定を行ない、どのような結論が得られたのかが冷徹に明らかにされるが、なぜそのような問題に関心を持つようになったのか、あるいはデータ収集の過程でいかなる苦労があったのかという研究への情熱については、触れられることが少ない。本書では、人類学を中心に種々の分野から、そしてアフリカ大陸内のさまざまな地域で調査に取り組んでいる研究者の内なる動機と、研究スタイルが熱っぽく語られている。さらに、通常は自制気味に開陳される今後の研究展望・理論化が大胆に試みられていることも、本書を魅力あるものとしている。各人各様のアフリカへの思い入れが、読者におそらくは共感をもって伝わってくる論文集である。

(池野 旬)

吉田昌夫・小林弘一・古沢  
紘造編 よみがえるアフリ  
カ 東京 日本貿易振興会  
1993年 241p.



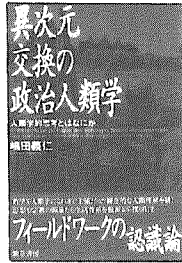
アフリカに関するニュースに重苦しいものが多いなかで、この本は、アフリカを明るく、肯定的にとらえる。アフリカに住みなれた先輩たちが、わかりやすく説明しながらアフリカ社会を案内してくれるような気楽で楽しい本である。どこから読み始めてもいい。道中、巷の人々の率直な意見もたくさん聞かせてくれる。アフリカ社会を探訪しながら、アフリカとどうかかわろうかと迷っている人や、特定分野でかかわっているがもっと広い視野で眺めてみたい人にとって、さまざまなメッセージを投げかけてくれる本でもある。たとえばそのメッセージとは、アフリカをもっと知ろう、アフリカは面白い教えに満ちているということであり、アフリカとのつき合い方、援助のあり方についてもっと考えてみようということである。

アフリカ研究の歴史の長い欧米などには、豊かな研究の蓄積を踏まえ、大陸全体を視野にいれて論じた本がある。この本も、多くの人が寄稿しており、全体として眺めると、幅広くかつ奥行きのある視野を持って、アフリカを理解する上で留意すべき基本的なことがらを掘り起こしているという意味で、その種の本に似ているといえるかもしれない。

また、この本がジェットロから出たことにも注目したい。今後の課題として重要だと思われる「売らんかな」の精神から「買わんかな」の精神への変化が、この本から読みとれる気がする。ジェットロ・アフリカ経済研究会の報告が土台となっているが、これだけの執筆陣をそろえたことはすばらしい。将来、続編か改訂版が出て、この前向きの視点を活かして、失業、難民、都市、芸術など本書で触れなかった多くの分野も取り上げてほしいものだ。巻末のアフリカ研究関係の図書館や団体、研究機関のダイレクターは便利である。

(丹埜靖子)

嶋田義仁著 異次元交換の  
政治人類学 東京 勁草書  
房 1993年 ix 343p. xxiv



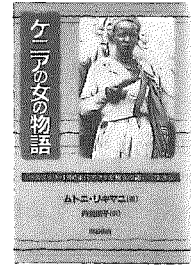
著者の人類学者としてのフィールドはアフリカであり、カメルーンのレイ・プーバ王国、マリのトンブクトゥなど合計5回の現地調査を経験している。しかし、本書にはアフリカそのものはあまり登場しない。「熱赤道」に位置するレイ・プーバの「酷熱の世界」での生活体験から語りおこす「序論」の導入部と、8章からなる本論の「第7章」でのレイ・プーバ王国の王都での「アフリカのお年玉」についての経験談ぐらゐのものである。著者自身も「あとがき」で「本書は私のアフリカでの研究調査を直接の主題にしているわけではないが、アフリカでの調査体験なしには本書の議論はありえなかった」と述べているように、アフリカは本書で展開される著者の議論のこやしになっている。そしてその議論、対話の相手として本書に登場する人物たちはまさに錚々たるものである。

各章の主要の登場人物を紹介すれば、「菊と刀」のベネディクト(序章)、レヴィ・ストロース(第1章)、柳田国男(第2章)、ラドクリフ・ブラウン(第3章)、バランディエ(第4章)、デカルト、パスカル(第5章)、「贈与論」のモース(第6章)、「国家に抗する社会」のピエール・クラストル(第8章)といった具合である。巻末の「人名索引」には、釈尊、キリストにはじまって「森の石松」にいたるまで、著者のあまりに広大な視野に入った200余名の論客の名が連ねられている。そして同業の大御所レヴィ・ストロースはいうに及ばずデカルト、パスカルあたりを相手にしても一歩もひけをとらず「私の考え」をぶつけていて壮観である。

とはいえ、既存の人類学の批判から出発して著者が構想する「異次元交換の政治人類学」とは、その名のとおり、モース、バランディエらの系譜に属するものであり、特にバランディエとは議論していない点が、はたからみるとやや物足りない。

(原口武彦)

ムトニ・リキマニ著 丹埜  
靖子訳 ケニアの女の物語  
東京 明石書店 1993年  
358p.



本書の原題は『パスブック F47927』である。南アフリカ共和国のアパルトヘイト政策

の根幹をなした制度のひとつにパス法(人口登録法)があり、このパスがアフリカの人々に人種のレッテルをはって、その自由を奪ったことをメディアはわれわれに伝えた。しかし、美しい自然と野生動物の宝庫として観光客で賑わうケニアで、植民地時代に同じパスが存在したことをわれわれの多くは知らない。

本書はムトニ・リキマニというケニア人女性の手になる作品であり、フィクションである。けれども冒頭から読み始めた者は、おそらくそれが物語であることに気づかないだろう。また仮に意識して読み進んだとしても、この語られる人々も、できごとも、あまりになまなましく、そして読者にせまってくるのである。

カマウという男性を軸にして話は展開するが、主人公は女たちである。マウマウのみならずアフリカ史における抵抗運動といえ、知らず知らず男性戦士たちを思い描いてはいまいか。実はこれが大きな誤解であり、ケニア独立の過程では女性も重要な役割を担ったことを本書は物語っている。やもすれば植民地制度の中に取り込まれがちな人々を覚醒させたのも、他ならぬ女たちであったのかもしれない。

巻末には原注以外にも訳注や地図が付されており、読者には大きなたすけとなる。また、訳者解説は「昔こんな場面があったこと、そしてそのできごとが現在のケニアへそのままつながっていることを知ってほしい」というメッセージをよく伝えた内容となっている。ケニア史における女性の役割を訴えてきた著者に対してと同様、こうした地道な仕事を発掘し、ともすれば見のがされがちな現代史の一面に光をあてた訳者にも敬意を表したい。

(望月克哉)

アンヌ・ユゴン著 アフリカ大陸探検史 堀信行監修 高野優訳 大阪 創元社 1993年 188p.



マス・メディアの影響だるうか、「探検」などといわれると、未知の巨獣に遭遇し奇習の村を「発見した」といった類のきわめて陳腐な筋立てがつい予想され、読む前から意気阻喪してしまいがちである。

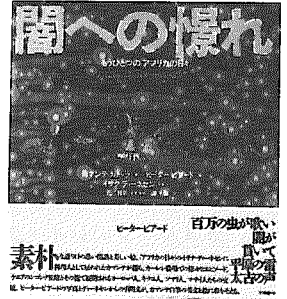
だが、いったん読み始めてみるとすぐに、著者が探検されるアフリカの側に身を置こうと努力していることに気づく。たとえば、「(探検家たちは) アフリカ人が暮らしていることも忘れて、無人の土地を踏破したかのように、『最初に』どこそこの山に登った、川を下ったと公言してはばからなかった」(39ページ)といった表現で探検家たちの偏見が随所で指摘され、彼らの「探検」も「発見」も19世紀のヨーロッパ人にとってのものにすぎないことが強調される。

ただし、この本は探検批判の書にあらず、むしろその逆である。百数十点に昇る美しい色彩の図版を従えた著者の筆力は、読者を19世紀の昔へ連れ戻し、ナイル川水源を目指した探検家たちの苦難と発見に満ちた旅を生き生きと追体験させる。リヴィングストンとスタンレーがタンガニーカ湖岸で「感動の出会い」を遂げるエピソードなど、トンネルの開通でもあるまいにと眉を顰めなくなる場面であったはずが、彼らの性格、生い立ちから死までを丁寧に描いた本書の流れの中では、「会えて良かった」と素直に共感できるシーンとなる。探検という行為に分かち難く結びついている、時代や地域に特有の文化的偏見を指摘しつつも、著者は人の持つ生来の探検心を肯定し、19世紀のヨーロッパ人にとってのアフリカ探検を鮮やかに描き出しているのである。

いまさら「アフリカ探検」もなかりうと、タイトルだけ見て手にとらずにいる人も多いのではなからうか。そうした人びとに、ぜひおすすめしたい一冊である。

(津田みわ)

カマンテ・ガトゥラ著 ピーター・ビアード編 イサク・ディーネセン写真・キャプション 西江雅之監修・解説 港千尋訳 闇への恐れ もうひとつの「アフリカの日々」 東京 リポロポート 1993年 281p.



本書の著者カマンテ・ガトゥラは、『アフリカの日々』で知られるイサク・ディーネセン(カレン・ブリクセン)のケニアの屋敷で料理人として働いていたキクユ人である。自らがアフリカを離れた後のカマンテの様子に思いを馳せ、ディーネセンはかつてこう記した。

『ひらけゴマ!』という呪文がカマンテの場合にあてはまる。いまや呪文は忘れられ、洞窟内の財宝は石の扉によって永遠に閉ざされてしまった。……この偉大な料理人の姿を……ひらきたい顔の無表情のキクユ族として以上に見る者は誰もいなかった(『アフリカの日々』晶文社 1981年 93ページ)。そして本書の編者であるビアードは、ディーネセンの言葉を引き取って序文でこう綴る。カマンテを伴ってカレン農場をひさかたぶりに訪れたとき、それは「まさしく「開けゴマ」の瞬間だった」と(本書 10ページ)。ディーネセンがアフリカを去ってから43年目にして初めて掘り出された「洞窟内の財宝」が本書だというわけである。

独特の味のあるカマンテの手跡で語られるカレン農場での日々と寓話。これをカマンテによる挿し絵とディーネセンの写真が飾る。そのキャプションは『アフリカの日々』からの引用である。ディーネセンとカマンテがそれぞれに抱いていたアフリカの日々が、まさに渾然一体となって、読む者の想像力を豊かにかきたててくれる。また、ディーネセン、カマンテに寄せられた手紙のいくつかが紹介されているが、これもいい味を添えている。編者ビアードの腕前は見事である。

原本の持つ味わいを損なわぬよう、原文と訳文とを併記する試みは成功したようだ。ピーター・ビアードのみならず、この日本語版における編集企画の努力にも賛辞をおくりたい。

(佐藤 章)